

加賀藩御細工所

加賀藩御細工所（おさいくしょ）は、16 世紀後半に加賀藩（現在の石川県、富山県）によって設立された工芸品製作所である。加賀藩の有力者であった前田家の支援を受け、1868 年に閉鎖されるまで、高度な技術を持つ職人や工芸品、装飾品などの発展に大きく貢献した。

この工房の本来の目的は、他藩の工房と同様、江戸時代（1603-1867）に先立つ数十年にわたる戦乱の時代に武器や武具を管理・修理することが本来の目的であった。混乱が収まると、従来のような工房の大きなニーズはなくなった。しかし、政情不安もあり、加賀藩初代藩主・前田利家（1539-1599）は、万が一、再び戦乱が起こった場合に備えて、工房を継続するよう命じたのである。時が経つにつれ、争いの危険性は減少し、工房の成員はより芸術的な活動へと移行していった。

加賀藩 3 代藩主・前田利常（1594-1658）は、工房の装飾美術・工芸の発展を積極的に奨励した。利常の影響により、工房は正式に「御細工所」（おさいくしょ）として設立され、あらゆる種類の熟練工が採用されるようになった。象嵌や加賀蒔絵など、さまざまな工芸技術が開花し、城下町として発展した金沢には全国から職人が集められた。

前田家は、自分たちの意思で職人を呼び寄せるだけでなく、積極的に多くの職人を招き入れ、そこに住まわせ働かせた。1600 年代の加賀の工芸技術の発展には、利常のほか、第 5 代加賀藩主の前田綱紀（1643-1724）が大きく貢献したとされている。祖父・利常に育てられた綱紀は、芸術に造詣が深かった。さらに、優れた工芸技術を研究し、標本化するために、工芸品の見本や品々を集めた「百工比照」として知られる膨大なコレクションを作成したのである。綱紀は、職人を工房の近くに住まわせるなどして、工芸の発展を促した。また、特に質の高いものを作った職人には褒賞を与えた。

加賀藩御細工所は、もう一つの点で新境地を開いた。それまでは、技術の知識を自分の子孫にのみ伝えた家によって発展してきた。しかし、加賀藩御細工所には、漆器、絵付け、金工などあらゆる分野の職人が集まり、肩を並べて仕事していたのである。その結果、多くの技法が生まれ、優れた作品が生み出されたのである。

加賀藩御細工所の代表的な作品に、江戸時代後期の御輿がある。1800 年代には、70 人以上の職人が在籍し、それぞれの知恵と技術を結集して、この精巧な作品を作り上げた。デザインは黒漆地に金蒔絵、螺鈿細工、金象嵌で、蔓に花をあしらった文様と梅花型の前田家の家紋を表現している。金具のデザインも凝っている。内部も蒔絵や金地と色鮮やかな絵が施されている。

加賀藩御細工所は、250 年以上続いた後、1868 年に永久に閉鎖された。1867 年に徳川幕府が崩壊し、明治時代（1868-1912）が始まり、日本の政治体制が大きく再編されたことがその理由である。大名は領地と権限を奪われ、藩は県に改編され、加賀藩の一部は 1872 年に石川県となった。